

太宰治 著

短編集『走れメロス』より

「駆込み訴え」

(新潮文庫)【913 D110】

「太宰の代表作は」と聞かれると、みなさんはどの作品を思いつかべるでしょう。「走れメロス」でしょうか、「人間失格」でしょうか。

私の場合、真っ先に頭に浮かぶのは「駆込み訴え」という短編です。教科書に載るような文豪の、しかも聞いたこともない作品、と二拍子揃えばおもしろくなさそうという印象を持つかもしれませぬ。ですが本作は「絶対におもしろいから！」と胸を張って皆さんにお勧めできる名作なのです。本作を少し俗っぽく紹介すると、「太宰治版『新約聖書』』ということになるのですから。

「駆込み訴え」のタイトル

にも表れているように、イエスを裏切るため役人のもとに

駆込んだユダが、イエスへの不満を訴えるという形式で物語は展開していきます。注目すべきは、①イエスを裏切ったユダの心中の解釈と、②それを表現する卓越した文章力の二点。作品を読み終えると、「十二使徒の中で最も深くイエスを愛したのはユダだったのでは？」と思ってしまうほど、斬新かつ説得力のある表現に、太宰の真骨頂が発揮されています。太宰作品に興味がない人は「こんな独特なものを見方をする人がいるのか」と彼の精神性に驚き、太宰好きの人は「そうそう、これこそ太宰！」と大喜びすること間違いなし。「青空文庫」という電子図書館(著作権保護が切れた作品を無料公開するサービス)でも公開されていますので、通学中の電車内でも、スマホでポチポチ試みてください。

「後世への最大遺物」

内村鑑三 著

『後世への最大遺物』

(岩波文庫)【018 11-9 119-4】

『後世への最大遺物』は、内村鑑三が明治二十七年の夏に開催した講演の内容が記述されています。

後世へ遺すものの中で、まず一番に大切なものは「お金」だといいます。内村はキリスト教徒でしたが実業教育を受けていたため、富を日本に遺して日本を救ってやりたいという考えをもっていました。しかし残念ながら、万人がお金を貯める力を持っているわけではありません。ではお金を貯めるのが下手な人はどうしたらよいか。

お金よりも良い遺物は「事業」であるといいます。事業とは目的をもって継続的に行う経済活動のこと。し

かし資本(お金)や理念、社会的地位がないと事業を起こしたり継続させたりすることは難しい。それではお金も事業もない人はどうしたらよいか。

内村は「思想」を残すこと、というのです。たとえ自分の人生で達成できなかった事であっても「われわれが実行する精神を筆と墨とをもって紙の上に遺すことができます」と内村は訴えます。しかしながら、誰もが文学者や先生になれるわけではありません。内村は執筆活動や教育活動は万人ができるものではないとい

うのです。それでは、お金も事業も後世に残す思想もない我々普通の人はどうしたらよいか。

内村は、今を生きる我々に、後世に遺すことのできる遺物で、利益ばかりあつて害のない遺物、「最大遺物」があるというのです。その最大遺物とは：続きはこの

本を読んで、自分の目で確かめてください!

松尾芭蕉 著(角川書店 編)

『おくのほそ道(全)』

(角川書店)【910 S74 A1-10】

本書は、有名な松尾芭蕉の「おくのほそ道」が、現代語訳と解説付きで文庫サイズにまとめられたものです。「おくのほそ道」は三百年以上前に書かれた紀行文ですが、やはりすぐく面白く、何度も読み返してしまう魅力があります。

本書には、各地の名所・旧跡や、そこに伝わる歴史や言い伝えなどが次々登場します。また、道中で生活の世話をしてくれる人たち、旧跡の案内をしてくれる人たちの様子も描かれており、人情味あふる旅気分も味わうことができます。

本文も俳句も、五感にうったえかける表現がたくさん登場します。例えば、

しばらくは

滝にこもるや

夏の初め

の句とその手前の文章からは、岩の洞穴の頂上から飛ぶように流れ出る滝を、洞穴に身をかがめて眺めている芭蕉らと同じ目線で眺めている気分に浸れます。水しぶき、滝越しに差し込む日差しを浴びているような感覚がします。現代文と解説を読んだ後、ルビ付きの原文を音読してみると、文のリズム良さも加わって、とても味わい深いです。巻末には、より詳しく知りたい読者のために、書籍、HPのデータベースなど、たくさん資料が紹介してあり、ここを入口に、さまざま作品にふれることもできます。芭蕉の足跡を辿る最寄り駅一覧も載っているのです、東北や北陸を訪れた際にゆかりの地に立ち寄ってみるのも、とても楽しいものです。

岡田尊司 著
『死に至る病 あなたを蝕む
愛着障害の脅威』(光文社新書)

結婚を機に、電車通勤を始めた。電車内で暇なこともあり、また、北野に赴任してから多くの先生の影響もあって、学生ぶりに読書をするようになった。その中でも印象に残っているのが、この本である。

豊かになつたはずの社会で、生き辛さを抱える人が増え続けている。心も身体も苦しく、死んでしまいたいと思う人が増え続けている。現代に突如現れた治療困難な数々の障害の背景にあるものは何なのか、克服する術はないのかを書いていく。

我々人間が喜びや幸福を感じる生物学的な仕組みは、実は三つしかないらしい。三つ全て脳内に放出される神経伝達物質である。一つ目はおなかいっぱい食べた時や、性的

な興奮の絶頂に達した時に放出されるエンドルフィンなどの脳内麻薬。二つ目は大学受験に合格した、試合で大逆転勝利を収めたなどの、困難な目的を達成した時に放出されるドーパミン。そして三つ目は愛する者の顔を見たり、愛する者と触れ合う時に放出されるオキシトシン。筆者はこれの中で、現代における障害や生き辛さの原因は、オキシトシンが上手く働いていないからだと考察している。

生きる事は楽しい時だけでなく、しんどい時や苦しい時が多々ある。個人的には、そういういた時に、自分の現状を俯瞰で見られるようになるのと、少し楽になる。もし何となくしんどいな、疲れているなど思っている人がいたら、手にとっていいかもしれない。

サマセット・モーム 著
『お菓子とビール』

(原題 = Cakes and Ale)
(岩波文庫) 【81
11-8
254-14】

二〇〇八年オーストラリアに留学中、私が大学入学時に一目惚れしたけどフラれた同級生から一通のメール。「この小説で卒業論文書いたんだ。」その小説が今回紹介するモームの『お菓子とビール』です。読んでみてとは書いていなかったものの、読まないわけにはいきません。たまたま留学していた大学に原著があったので読んで見ましたが：：：難しすぎる：：：六〇七割くらいの理解度だったでしょう。か。教員になって北野の図書館に翻訳版があることを発見し、当時の懐かしい記憶を思い出しながら手に取りました。モームと言えばイギリスの有名な小説家で、彼の英文は昭和の大学入試でござって取り上げられていました。この『お菓子とビール』は『人間の絆』『月と六ペンス』に並ぶ彼の代表作です。この小説は亡くなった文豪の伝記執筆を託された友人から、文豪の

読書案内

無名時代の情報提供を依頼された語り手(アシェンデン)による一人称で話が進むメタ小説となっています。物語のメインは語り手の少年時代と青年時代における文豪の最初の妻(ロウジー)との思い出です。ロウジーは天衣無縫で明朗闊達。「銀色に輝く太陽」のような人でした。こういう女性を男性は好きにならずにはいられません。どんな思い出があったのでしょうか？ 楽しく読み進めることができます。

結局なぜこの小説を卒論に選んだのかは聞けずじまいでしたが、モームの小説を読むきっかけをくれました。本を読む入り口は人それぞれです。へ がフラれた女性から勧められた本」というので手に取るのも悪くないでしょう？